
「夢通信」

第1号 (2017年01月31日配信)

●超高齢社会へ向けて—新しい発想を
超高齢、要介護、病気だからといって

「卒業」させない！

今は超高齢社会と、よく言われる。老々介護の時代だとも。超高齢になれば足腰が弱くなる。耳も遠くなる。妻や夫を介護しなければならなくなる。デイサービスを利用するようになる。老人ホームに入所する人も。

そうすると、今まで参加していたサロンや老人クラブなどは卒業だ。

では福祉とはもともと何だったのか。厚労省は言っている。どんなに重い要介護でも、住み慣れた家や地域でその人らしく生きられるように応援しようと。ならば、そういう人たちを簡単に卒業させてしまったら、福祉は成り立たなくなる。なんとしても卒業させないのが福祉だったのだ。先日、福岡県の福津市で、社会福祉協議会のスタッフと一緒に支え合いマップづくりをしていて、そういう事例を10個見つけた。

＜福津市でのマップ作りで出てきた「卒業」させない問題＞

本人の事情	卒業の対象	卒業させない策
超高齢で耳が遠くなった。 「通訳」がいたが、要介護になった	結果として、サロンへの足が遠のいた	新しい「通訳」を掘り起こそう
109歳になった	老人クラブから「卒業」した	メンバーが本人宅を訪れて「押しかけクラブ」
膝の手術を控えている	女性サロンから引退。	メンバーが本人宅を訪れて「押しかけサロン」
同上	畑で野菜づくりができなくなった	皆で畑に連れ出そう
デイサービスを利用し始めた	日程が重なり老人クラブに参加できなくなった	ケアマネと日程調整で参加可能にしよう
元大学教授。元自治会長で、デイサービスを利用し始めた	地域活動から完全に引退	他にも文化人が多数いるので、教養講座の講師になってもらおう
90代の男性。認知症の妻の介護に専念	サロンや老人クラブなど地域活動から引退	要介護の妻同伴の参加も勧めよう
老人ホームに入所	地域から完全に撤退	里帰りで自治会活動の参加を応援しよう。組費をまだ徴収していた
高齢で足腰が立たなくなった	カラオケサークルに行けなくなった	仲間が車で運んであげよう
長年引きこもっている		密かに犬の散歩をしていた。ならば犬を通したふれあいを広げよう

●ご近所福祉の充実度を知りたいという方に

ご近所力を測る

地域福祉の大事な圏域として「ご近所」をどう評価したらいいのか。ご近所の福祉力を測る場合、どんな点が評価の基準になるのか、という程度なら出てくる。それを整理してみた。

柱だけを示すならば、以下のようになる。ご近所の福祉力を測る基本的な項目は四つある。①は要援護者の当事者力。②は担い手側の対応力（ご近所福祉力）、③はご近所の助け合い力。①と②がうまく機能するためのご近所のふれあいや助け合いの環境。そして④はご近所支援力。民生委員や自治会等、ご近所を支援する人たちの力量だ。

(1)当事者力を測る

まず当事者力を測る。

次頁のマップの、橙色の■が一人暮らし高齢者だから、ここを見ていくとわかる。右下の部分では、「戸を開けている」「外へ出て声掛け」と、自分の安全を図るための努力をしていることがわかる。一人暮らし同士が見守り合っている。「お互いに窓を開けて声掛け」と。

中央左の90歳の一人暮らし女性は、「ゴミ出しは自分で」と自立努力をしている。同じく最上部の90歳の一人暮らし女性は、デイサービスから帰宅後、娘が帰ってくるまでの間、淋しい時に世話焼きさん2人の家を訪れている。その他、隣人からおすそ分けをいただいたり、病院まで車で運んでもらったりしたとき、ほとんどの要援護者が「お返し」をしていることもわかる。加えて、お地蔵さんに花植え、庭作り、畑仕事など、できることはやっている。

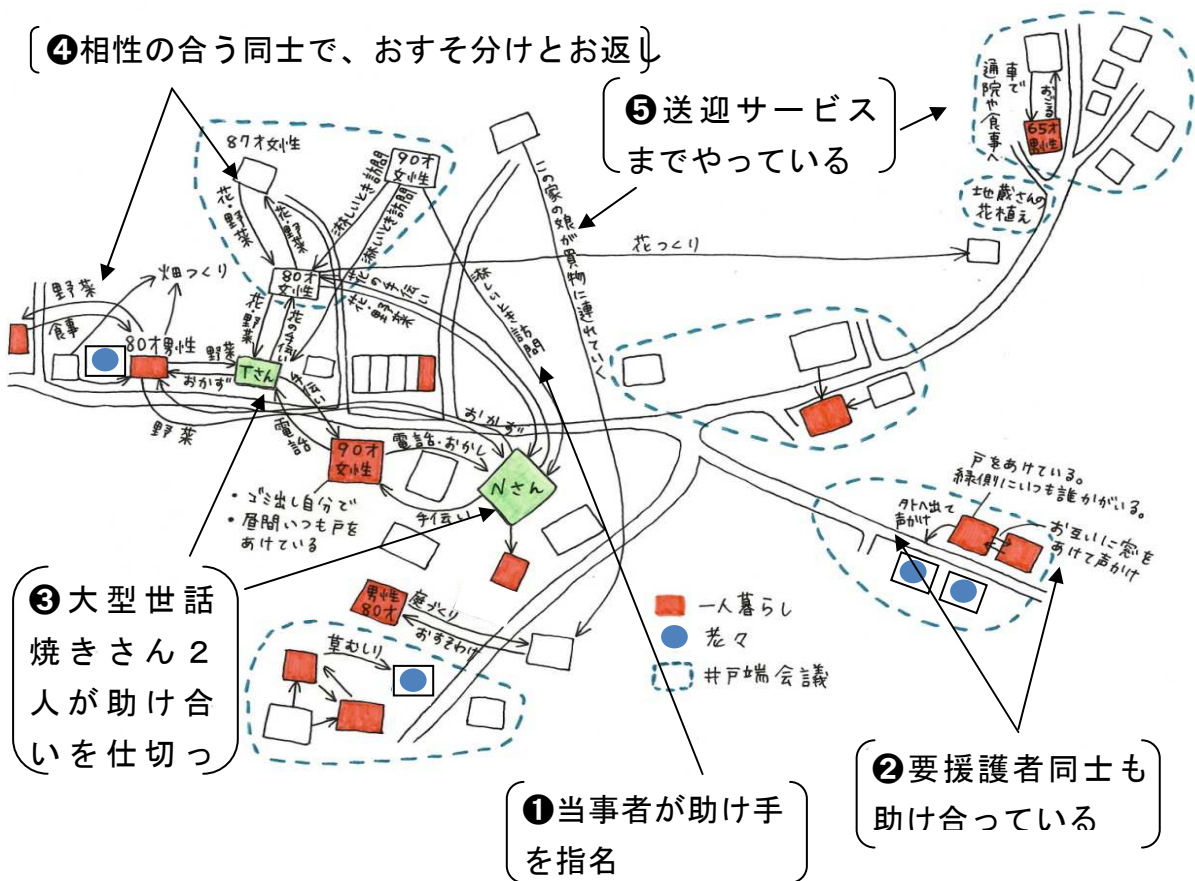
というわけで、このご近所の「当事者力」は全体的にかなり優秀だとわかる。これほど当事者力の事例がマップづくりで出てくるのは珍しい。

(2)ご近所福祉力を測る

次いでご近所福祉力。この観点から既出のマップを見てみると、このご近所には2人の大型世話焼きさんがいて、これだけの情報を持っているし、それぞれの個々の関わり合いを掌握していた。この2人を中心に、ご近所福祉が現実的に「推進」されていた。

そしてこの2人だけでなく、ご近所内の人が隣人からのニーズに応えている。しかも世話焼きさんは、それも掌握していた。大小の世話焼きさんが、あうんの呼吸で連携しているのだ。

というわけで、このご近所は、「ご近所福祉力」の点でも満点に近い成績を上げていると言える。



(3)助け合い力を測る

次は助け合い力。まずマップで見えてくるのは、隣人同士のおつき合いの激しさである。それがおすそわけとお返しの行為となって現れている。交流が盛んであるとともに、助け合いが盛んだということだ。一人暮らし高齢者が家をオープンにし合っている。あるいは寂しい時に世話焼きさん宅に駆け込むというように、家に入り合うこともできている。これができるご近所は助け合いが容易だと言える。

寂しい時に世話焼きさん宅に駆け込むだけでなく、車での移送までできているということは、困り事をオープンにし合っている証拠ともいえる。

マップの中に点線で囲ったところがたくさんあるが、ここが井戸端会議が行われている範囲と言うことである。こんなにもあちこちで井戸端会議が開かれていた。それだけでなく、中央部に道路が走っているが、ここを世話焼きさんが散歩しながら、それに道路の両端の人が加わるというようにして、「動く井戸端会議」が開かれていると2人の世話焼きさんが証言していた。ふれあいも十分に行われていた。

(4)ご近所支援力を測る

最後がご近所支援力。残念ながら、この時のマップづくりでは、ここまで調べることができなかった。ただ、2人の大型世話焼きさんがかなりしっかりした人で、2人で事実上のご近所支援もこなしている。優秀な世話焼きさんだと、こういうことができるという利点がある。そうすると、課題になるのは、難しい問題を上層へ振り分けることまでやっているかどうかということだ。そこまで突き止めることはできなかった。移送サービスをこのご近所内で、2人が個人的に請け負っているが、さらなるニーズが出てきたとき、どのように対応するか。別の担い手を掘り起こしたり、ネットを組むといったことまでできるかが課題になる。

●「住民流」を超えて

”夢の福祉”を追い求めて40年。その全貌が明らかに

本研究所はこの40年、夢の福祉を追い求めてきた。最初に取り付いたのは、住民だ。福祉は関係者が作り出し、実践するものだと考えられているが、一方で住民が日常生活の中で、さりげなく福祉なるものを実践していることに気づいてから、その中に「夢」が詰まっているのではないかと期待したのだ。住民流の福祉を発掘した後は、それをさらに拡大・発展させたところに、もっと面白い福祉、「夢の福祉」が潜んでいるのではと考えた。40年もかかったが、ついに「夢の福祉」に限りなく近い発想が見つかった。これをまとめたのが、「夢の福祉—福祉の常識を覆す15の発想」である。

「夢の福祉」への15の発想一覧

1. **障害は能力だった**—ネガティブ福祉からポジティブ福祉へ
—障害はハンディキャップどころか、見方を変えれば「能力」だった。
2. **遡る**—「対処」から「備える」へ
—問題が生じてから対処しても解決困難。事前に備えるのが正しい。
3. **フェアネス**—弱者に超ド級の肩入れ
—福祉サービスのレベルが「普通よりも遥かに高い」レベルだったら？
4. **「こだわり」に乗る**—自己実現の応援
—引きこもりの人も、何かに「こだわっている」。そこに乗れば…
5. **「ソーシャル」**—脱「ボランティア」
—今までの「ボランティア」は縛りがあり過ぎた。これを解放しよう。
6. **世話焼きさん**—養成から天性へ
—地域では天性の世話焼きの資質を持った人が活躍している。
7. **本業主義**—ビジネスと社会貢献の統合
—企業の力は本業中に発揮されている。ならばそれをそのままいただく。
8. **「入れてあげる」**—組織をひらく
—要援護者も受け入れる組織に。開かれた組織が福祉になる。
9. **おつき合い革命**—人間関係の大転換
—日本人のおつき合いは助け合い拒否型。詮索しお節介しこじあげよう。
10. **助けられ上手さん**—自助の発想転換
—福祉は要援護者が「助けて！」と発することから始まる。
11. **ボランティア療法**—当事者をこそ担い手に
—受け手ほど担い手になりたがる。しかも人を助ければ本人に治療効果が。
12. **「ご近所」の発見**—地域福祉の作り直し
—地域にご近所があった。ここに当事者も世話焼きさんもいる。
13. **支え合いマップ**—地域を「見える化」
—マップを作ると助け合いがよく見える。それを支援すればご近所福祉だ。
14. **住民流**—本物福祉を先取り
—住民には住民なりの流儀がある。そこから本物福祉が次々と生まれ出た。
15. **地域はジグソーパズルだ**—分業から統合へ
—分業が徹底して協働しなくなった。夫々が1つのピースと自覚しよう。

●サロンで福祉

支え合いマップを広げて サロングループのセミナー

このたび富山県滑川市社会福祉協議会の主催で、ふれあいサロンを開催する人たちを対象としたセミナーが開かれた。通常のサロンセミナーと違うのは、支え合いマップを広げながら必要事項を記入していくことだ。

まずは、メンバーの自宅に印をつける。次いで最近退会した人とか、一人暮らしの人、老々世帯の人、要介護の人などと該当する家に印をつけていく。その結果、どんなことがわかったか、何を考えたかを、発表してもらった。



じつは我々なりに彼らに期待していることがあった。できれば要援護者も仲間に入れてもらえないものか、一人暮らし高齢者や老々世帯も加えて、見守りなどもする。仲間の困り事にも応じてもらいたい、などなど。

発言で注目すべきものを整理してみた。

(1)要介護の人にも参加してもらいたい

■去年から無我夢中でサロンをやってきた。老人クラブの行事とサロンの区別がつかないような状態です。行事には、ホント言うと、寝たきりまでいかなくても、要介護の人もなんとか集めたい。いつも元気な年寄だけが寄っておりますんで。

■今日聞いた話は、いままでとは全然違うのでちょっととまどっています。

■要介護の人はまだ来ていらっしゃらない。私たち、受け入れる方もあの人 cameたら大変という声があるので。なんとか雰囲気を変えて来ていただきたいなと思っています。増やしたいという気持ちもあります。

■課題としては、声かけはしているが、あの人参加するなら行かないという人が結構いる。あとですね、介護が必要だけでも元気な人はけっこう出てきていただいて、車いすも助けてあげているが、もっと大変な人で施設にずっと入りっぱなしという人はまだそこまでみてない。

(2)意外な事実に気が付いた

■マップに今まで参加している方を書き入れたんですけど、地域は広いんですね。ずいぶん遠いところから来ている人もいるなということがわかりました。

(3)一人暮らしの方などを洗い出して声掛けしたい

■マップで、ひとり暮らしの人とかを洗い出して、これから声かけをしていくのに参考にしようかなと思っています。

■ひとり暮らしでまだ参加してない方がいらっしゃるので、声をかけていきたいのと、男性の参加を増やしたい。

■私の地区は1000軒近くあるが、行事に参加する人は20人ほどしかいない。名簿を見ながら対象になる方を探して、担当者を決めて声かけしていく必要があるのかなと思っています。

■マップで最近参加されていない方が、ちょっと見えてきている。その方たちに声かけをしよう。

■マップで調べたら8軒ほどサロンに入っていない人がいることがわかった。パークゴルフやお茶会で人数を増やしていけたらなど。

■いま出てきている人は元気な年寄ばかりなんで、ひきこもりがちな人をなんとか考えていきたい。個人のプライバシーに関することをどこまでしゃべってもらえるのか、ですが。

(4)参加者の中の老々世帯に気が付いた

■いただいた地図で参加者の中に老々世帯が3世帯あることがわかった。この方たちを参加させられないかなというのが現状。もうひとつは、参加者がどういう希望を持っているか、その意向に基づいたサロンのメニューを増やして、参加者を増やすということが今回の研修でわかりました。

■気が付いたことがある。100名ほどの世帯がある町内だが、その中の20世帯が老々介護だということがわかりました。支援を受けていないにかかわらず20世帯もあることに驚いた。ひとつうれしいことに、この20世帯の老々介護の方が、夫婦で話し合ってサロンに出てくださいっている機会が少しずつ増えて喜んでいる。マップの色づけをしてはじめて気づいた。

(5)サロンの課題に気が付いた

■最初はみなさん元気でしたが、ここ2年ほどで亡くなった人が2名、入院が2名出たので、意欲が減って、暑かったらやめるとか 出席がままならない人が2、3人おられたり、これはみんなが辿る道なんですけど、もう少し年齢の若い人も参加していただければ続けられると思うんですが。

■この調査をしてみて課題がわかってきてよかったなと思いました。出てこない人の人

数とか。また、あの人もいるこの人もいると思って、これからをそういう人にも声かけ
をしたいなと思っています。

(6)メンバーでない認知症の人が気にかかる

■一月前から話をされなくなってきたので、ちょっとおかしい、認知症の始まりかなと思える人がいます。1週間に2, 3回行って話をして、最近はカラオケとか行事に参加していただくように声かけしている。

■地域に要介護の人が2人ほどいらっしやって、一人は徘徊まではいかないが散歩をする。夜にも天候にも関わらず歩く。それでよく転ばれる。メンバーではないが声をかけていきたい。

(7)仲間の困り事にも対応していきたい

■ひとり暮らしの方なんですけど、仲間の困りごとはあんまりつきつめて聞いたりはしないが、これからは解決していきたい。

●団塊世代の地域デビュー もう一つの入り口

「要援護者」から出発しよう

今、福祉界で最大の話題は団塊世代。特に男性だ。彼らにとっての地域デビューと言えばボランティア活動だろう。むろんそれもいいが、もっと足元にやるべきことがあるのではないか。

要援護者として出発

支え合いマップ作りで議論に上るのが一人暮らしの高齢男性である。マップでは、気になる人としてまず一人暮らしの人を探し出す。しかし女性はあまり心配はならない。気になる相手はやはり男性なのだ。

シニア男性は、まず自身を要援護者として考えてみるべきなのだ。彼等の地域デビューを語るのなら、ここから始める必要がある。

①隠さない・助けを求める・要援護者同士で助け合う

要援護者としてまずやるべきことは何か。まず①「隠さない」「オープンにする」。次いで②「引きこもらずに、周りとは交流する」。この二つをしっかりと実行できれば、周りの

人たちはどれだけ助かることか。つまり社会の役に立っているということである。

②「豊かさ」づくりのおすそ分け

要援護者の一人としての社会的な営みとは別に、もう一つの流れがある。彼らが退職してすぐ始めるのが趣味活動である。これは専ら自分の楽しみのための活動だが、やり方によってはここから社会活動に入ることもできる。たとえば、①近くの農家から畑を借りて家庭菜園を楽しむ、②できた作物をまわりに配り歩く、③蓄積した農作業のノウハウをおすそわけ、④自作自演のハウツービデオを制作、⑤公民館の生涯学習講座などに招かれて講義

③裏方に回る(後方支援役)

最前線の活動とともに、その後方支援の活動も大いに社会の役に立つ。ある女性主体の活動グループに男性が数名参加していた。その男性たちがやっているのは、写真撮影、音響設備などの設定や補修、会議資料の作成など、裏方のことばかりであった。

④グループで自分の役を探す

動物園ボランティア（正式には「シルバーガイド」）の志願者向けの事前研修会が開かれたことがある。活動の内容を知るにしたがって「私には合わない」と、以降の参加を辞退する人もいるという。受講者にこんな作業をやらしてもらった。自分の持ち味を生かしてどんな活動を園内でしたいのか、そのアイデアをいくつでもいいから出してみるように指示した。

職業上の必要から外国語に堪能な人は「外国人向けのガイドをしたい」。広告代理店に勤めていた男性は、車椅子でも見学できるコースを設けたらどうか、電気自動車を走らせたらどうか、スポンサー付きの風船や傘なども作ったらどうかなど、次々とアイデアを考え出していた。会社で管理職の立場にいたからか、動物園の管理運営のアドバイスをしたいというのも目立った。カメラ好きの男性は、「動物写真の撮り方を教えたい」。シニアが地域の活動グループに加入した場合、とりあえずは自分の腕が生きる部分を、その主たる活動や従たる活動の中から探し出せばいいのだ。

⑤男性の得意技を生かす(企業時代の腕も)

男性はグループの中でどんな役割を果たせるのか。こんな話がある。男性の料理教室を卒業した人たちで新たに活動グループを立ち上げた。その発会式に招かれた社会福祉協議会の事務局長が、男性の役割について改めて見直したと言っていた。まず発会式の進め方が見事である。活動企画もなかなかいい。経理などは社会福祉協議会の経理など恥ずかしくて見せられないほど見事なものだった、と。

地域のグループは、大抵は女性主体で成り立っている。そこで欠けているのがこうした資質ではないか。つまり今の地域グループの欠けている部分を男性が埋めることができるということを事務局長は発見したのだ。

●地域の人材ーコーディネーター

あなたのコーディネーター適性は？

地域で助け合いや福祉活動をする場合、コーディネーター役がいなければなりません。自分が「やる」のではなく、人に「やらせる」ことが得意な人。「仕掛け屋」とも言います。これは半ば、天性の資質で、誰でもできるというものではありません。福祉推進員や民生委員、生活支援コーディネーターなども、この資質が必要です。さて、あなたはコーディネーターが務まる資質かどうか、チェックしてみてください。

あなたのコーディネーター適性は？

地域で助け合いや福祉活動をする場合、コーディネーター役がいなければなりません。自分が「やる」のではなく、人に「やらせる」ことが得意な人。「仕掛け屋」とも言います。これは半ば、天性の資質で、誰でもできるというものではありません。福祉推進員や民生委員、生活支援コーディネーターなども、この資質が必要です。さて、あなたはコーディネーターが務まる資質かどうか、チェックしてみてください。

- ① 日常的にご近所まで出かけて、人と接触している.....
- ② 人の資質や能力を見分けられる.....
- ③ 人を上手に動かすのに向いている.....
- ④ どんな「難しい人」ともうまくやっていける.....
- ⑤ 人の好き嫌いがなし、誰にも好かれている.....
- ⑥ 様々な分野に、幅広い人脈を持っている.....
- ⑦ 自治区、校区、市町村の各圏域に人脈がある.....
- ⑧ 課題を各分野、圏域に割り振る力量がある.....
- ⑨ 反発し合っている同士でも、結びつけられる.....
- ⑩ 役所の人や専門家とも、臆せず話せるし、要求も出せる.....

あなたのコーディネーター適性〈解説〉

① 日常的にご近所まで出かけて、人と接触している

コーディネーターは大抵、市町村域や校区あたりで活躍するものとされているが、末端の圏域である「ご近所」に日常的に出かけるようであれば駄目である。当事者はこの「ご近所」にいるのだから、活動の拠点は「ご近所」に置かなければならない。

②人の資質や能力を見分けられる

人を生かし、人と人をつなげるのが役割だから、人の資質を見分けられる力量がなければならぬ。この人はこういうことが向いている、この人はこういうことはできないと見定められなければならないのだ。

③人を上手に動かすのに向いている

人の資質を見分けられるとともに、その人を上手に動かすことができなければならない。この能力を持っているかどうか最も基本的な要件になる。

④どんな「難しい人」ともうまくやっていける

意思の疎通がしやすい人に接触するのは簡単だが、それができにくい、ひと癖あるような人をどう動かすかで、コーディネーターの力量が問われる。こういう人は苦手だ、などと言ってはられない。

⑤人の好き嫌いがなく、誰にも好かれている

なによりも人が好きでなければならない。人を好き嫌いで分けず、誰でも受け入れるし、誰にも好かれる人であるといい。

⑥様々な分野に、幅広い人脈を持っている

人を生かすには、それだけ多様な人材を確保していなければならない。福祉関連だけでなく、経済や政治または自治、文化関係など、様々な世界に人脈を持っていれば、いざという時に生かせる。

⑦自治区、校区、市町村の各圏域に人脈がある

様々な世界だけでなく、各圏域の人ともつながっていなければならない。自治区や校区、市町村域のそれぞれに人脈を持っていれば、課題に対応する時に彼らをうまく生か

せる。ご近所だけでは対応できない時、上層の圏域を活用する必要が出てくるからだ。

⑧課題を各分野、圏域に割り振る力量がある

人脈を持っているだけでなく、課題が出てきたときに、それらの人たちや圏域の組織にうまく割り振ることができなければならない。これが最も難しい。

⑨反発し合っている人や組織同士でも、結び付けられる

人や組織をつなげるのが役割だが、反発し合っている組織を結び付けなければならない場合もある。あるいは、普段あまり関係のない組織同士を結ぶ必要もある。それらをうまく協働させられるか。

⑩役所の人や専門家とも、臆せず話せるし、要求も出せる

つなげる対象には、役所の人もあるし、専門家もいる。そういう人とも、臆せず 접촉し、コーディネートの対象にできるか。